
奇跡はきっと

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

奇跡はきつと

【Nコード】

N1393I

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

第二次世界大戦直後。ただひたすら我が子を待つ老婆。その想いはどうなるのか。岸壁の母やそいったお話を元にして書きました。

第一章

奇跡はきつと

戦争が終わった。長く辛い戦争だった。

多くのものを失い多くの人が亡くなった。街は廃墟となり何も残ってはいない。しかし人々はそんな中でも何とか生きようとしていた。

「おい、その酒はやばいぞ」

「そうなのか？」

酒を買ってその一升瓶を如何にも大事そうに抱えるようにして持っている若い男に対して彼の友人と思われる復員兵の服を着た男が言っていた。

「それカストリだぞ」

「げっ、これがかよ」

「それ三合飲んだら死ぬぞ」

復員兵服の男はこう彼に告げる。

「三合でな」

「そりやまたえげつない酒だな」

「ああ。だから飲むな」

真面目な顔でまた告げていた。周りにあるのは瓦礫と何とか残っている感じの黒焦げが付いてしまったコンクリートの建物だけである。そして粗末なバラックの家が所々にある。その中をこれまた粗末な身なりの人々が生氣のない顔で行き交っているだけである。

「絶対にな」

「ちえっ、折角手に入れたのによ」

「死ぬよりましだろ」

復員兵服はこう若者に告げた。

「折角あの戦争から生き残ったんだからな」

「まあな」

それは若者も頷くことだった。

「ガダルカナルで何度死ぬかと思ったかわからねえよ」

「だったらその命粗末にするな」

復員兵服はまた彼に告げた。

「いいな」

「ああ。そういえばな」

若者は仕方なく酒の栓を空けて瓶の中にあつたそれを出しながらそのうえで相棒に話してきた。まだ酒を名残惜しそうに見てはいたが。

「マチさんはやっぱりあれか？」

「ああ、あれだよ」

復員兵服も若者に返した。

「今日も飯炊いて待つてるさ」

「息子さん待つてか」

「そうさ、待つてるよ」

復員兵服はここで遠くを見た。そこには一軒だけ残っている家があつた。小さいがそれは一軒家でそこにぽつんと建っていた。

「あそこでな」

「そうか。待つてるのか」

「ああ、待つてるよ。息子さんをな」

こう若者に語るのだった。

「ずつとな」

「息子さんつて確かあれだろ？」

ここで若者は言つた。視線を曇らせて。

「インパールだったよな」

「ああ、あそこだったんだよ」

第二次世界大戦において日本軍が最も損害を出した戦いである。その損害は何と九割に達した。軍の損害としては消滅と呼ばれる。犠牲を厭わないと言われていた日本軍であつたがそれでもここまでの損害を出した戦いは空前絶後のものであつた。

ここまで損害を出してしまった理由はひとえに作戦の無謀さである。しかしこれはあくまでこの軍の司令官が異常であつたのであり日本軍全てがここまで異常だつたのではない。確かに官僚主義的傾向であり人選能力に甚だ疑問が残るが陸軍もその第二次世界大戦においては数々の武勲も挙げている。一概に無能極まる組織とは言えないのである。ただしどうしてもその人選能力には疑問が残る組織であつたが。

「あの人の息子さんな」

「生きてるのか？」

「死亡通知は出てないぜ」

復員兵服はその家を見ながら述べた。

「とりあえずはな」

「じゃあ生きてるのか？」

「だいたいな」

この辺りは今一つわからないことだつた。この戦争においては死亡通知が出ていないからといって信じられるものではなかつたのだ。少なくともシベリアに連れて行かれた連中よりはましだろ」

「露助かよ」

若者はここでロシアに対する蔑称を言葉に出した。

「あの連中だけは信じられねえからな」

「最近よ。あれだぜ」

復員兵服もまた忌々しげに話す。

「共産主義つてあるだろ」

「ああ、露助の思想だよな」

「それを万歳してる連中がいるつてな」

「くそつたれだ」

若者はそれを聞いて忌々しげに言い捨てた、

第二章

「それに染まっつて露助に国売る気か？ふざけるなよ」

「そう思うだろ。けれど最近お偉い学者様達は違つようだぜ」

復員兵服もまたその口を忌々しげに歪めさせていた。

「何でもよ。これから共産主義らしいぜ」

「はあ！？それで満州みたいになるのかよ」

満州で何があつたのかも彼等の耳にも入つていた。しかし当時はこういったことはマスコミや知識人の間では無視されたのである。

これは日本の歴史において最悪のブラックジョークであるがこの時代からソ連の崩壊前までソ連は『民主主義国家』だと吹聴する勢力が存在していた。それどころか『平和勢力』だとも呼んでいた。

勿論両方共真実ではない。大嘘であると断言できるものだ。このようなことは満州で何があつたのかを知っていればこのようなことは断じて言えない。我が国には民主主義も平和も冒瀆する愚か者達が存在していたことは忘れてはならない。

「ふざけんなよ」

「全くだぜ」

彼等はそんな話をしていた。戦後は混乱し何もかもが変わろうとしていた。多くの者が帰つて来なかつたがそれでもであった。

その老婆橋田マチは家に一人でいた。畳の上に古い座布団を置いてそのうえで一人静かに座っている。その彼のところに今来客が来た。

「マチさん」

「はい」

その声に応える。すると髪の高い老婆が入つて来たのだつた。少し太り気味で落ち着いた体格のマチに比べて彼女は痩せていた。その彼女がやって来たのだ。

「今日もここにいたんだね」

「そうだよ、サクさん」

マチはにこりと笑ってその痩せた老婆に応えた。彼女は庭の縁側の側にいてそこから庭を見ているのだった。庭には左右に松等の木々や石があるだけである。何の変哲もない庭であるがそれでもマチはその庭をずっと見ているのだった。まるで誰かを待つように。

「作ってはいたけれどね」

「そうかい、今日も作ってたのかい」

「あの子が何時帰ってきてもいいようにね」

にこりと笑って自分の隣に座ってきたサクに述べた。

「用意しているよ」

「あれだね」

ここでサクは部屋の真ん中を見た。ちゃぶ台の上には粥と梅干が置かれている。それは丁度二人分あった。それが静かに置かれていたのだ。

「今日もあれなんだね」

「あの子が帰ってきてもね」

マチはここで寂しいような微笑みを浮かべるのだった。

「お粥みたいなものしか出せないけれどね」

「お粥みたいなのではないよ」

しかしサクはマチにこう言うのだった。

「今時お粥だってね。そうそう食べられたものじゃないよ」

「そうなんだよねえ。今は何もないからねえ」

「仕方ないよ。それはね」

サクは寂しく笑ってマチに告げた。

「私のところは女の子だけで誰も結婚していなかったから悲しい思いはしなかったけれど」

「そうだったね」

「あんたのところは。裕二郎ちゃんね」

マチの息子の名前であった。

「あの子のお粥だよ」

「そうだよ。だから何時帰ってきてても食べられるように」
マチはにこりと笑って話すのだった。

「用意してるんだよ」

「そうだよね。何時帰ってきててもだったよね」

「帰ってくるよ」

マチの笑みはそのままであった。

「絶対にね」

「信じてるんだね。裕二郎ちゃんのこと」

「当たり前だよ。私の子だよ」

今度はこう話すのだった。

「わかってるんだよ。私には」

「帰ってくるのがだね」

「生きて絶対に帰ってくるよ」

彼女はこう信じているのだった。完全に。

「だからそれが何時でもいいように待ってるんだよ」

「そうだよね。絶対に帰ってくるよね」

サクもマチのその言葉に頷くのだった。

「あの子はね」

「何時になるかわからないけれど」

ただマチはここでもこうも言った。

「絶対に帰って来るよ」

「そう信じてるんだね」

「そうだよ。私にはわかってるから」

微笑んでの言葉であった。

「何時か帰ってきてそれで私が作った御飯を食べるんだよ」

「そういえばずっとここに住んでいたからね」

サクはふとこうした言葉を出したのだった。そのマチの横で。

第三章

「裕二郎ちゃん。子供の頃からずっと」

「旦那が死んだのはあの子が二十になった時だったね」

「そうそう。穏やかだったねえ」

「あの時お葬式が終わってから私とあの子で茄子の漬け物を食べたのよ」

「茄子？　そういえば今はないね」

「今作ってるんだよ」

マチは今度は家の右手に顔をやった。台所がそちらにあるのである。そこに何かがあるのかはもうサクもわかつていることであつた。

「あの子が今帰ってきてても食べられないけれどね」

「じゃあ帰って来るのは食べられるようになってからの方がいいね」

「そうだよ。折角苦労して手に入れた茄子なんだよ」

この時代食べるものがとにかくなかった。だからマチも今はお粥に梅干なのだ。実際に餓死する者さえ出ており危機的な状況であつたのだ。

「それを食べてもらわないとね」

「そうだよ。本当に」

「帰って来たら一緒に食べるんだよ」

またその台所の方を見ての言葉であつた。

「二人でね」

「その時は待ち遠しいね」

「全くだよ」

マチは我が子が帰って来ることを確実だと思つていた。そうして毎日家で食事を作りながら彼が戻って来るのを待つていた。しかし周りの人はそうは思つていなかった。

あの復員兵服とカストリを買つていた若者は今は屋台をやつていた。随分と粗末な今にも壊れてしまいそうなのその屋台ですいとんを

やっていた。客達にそれを売りながらそのうえでマチのその家を見てそのうえで話をしていた。

「なあ」

「何だ？」

復員兵服はそのままだった。服も碌にないから当然だった。その彼に若者が声をかけてきたのである。

「マチ婆さんの息子だけだよ」

「ああ。あの人がどうしたんだ？」

「生きてるのかね」

若者は丁度客にすいとんを出しながら言うのだった。かなり薄い汁の中に小麦粉の団子が何個が入っているだけである。それがすいとんであった。

「本当に。どうかね」

「さあな」

復員兵服は相方の言葉に首を捻らせるだけであつた。

「生きていればいいけれどな」

「インパールだからな」

その九割の参加兵力が消えてしまった戦いである。後に球界において知将の名を欲しいままにした三原脩もここで死線を彷徨っている。

「果たして生きているかどうか」

「わかったものじゃねえよな」

「イギリスの連中に捕まったんじゃねえのか？」

復員兵服はこうした予想も立ててきた。

「ひよっとしたらよ」

「イギリスにか」

「相当酷い連中だつて聞いてるけれどな」

復員兵服の男の言葉は真実であつた。イギリスの捕虜収容所では日本兵は人間とさえ思われていなかった。虐待もありまた赤痢菌の入った蟹だけがいる島に置かれそれを食べて死ぬに任されるといっ

た仕打ちまで受けていた。捕虜になってもそうした有様であった。

「どうなるやらな」

「わからないか」

「駄目なんじゃねえかとは言いたくねえけれどな」

復員兵服の男は首を捻り難しい顔をしだした。

「けれどよ、インパールでしかもそんな相手だぜ」

「ああ」

「やばいだろ、どう考えても」

この言葉を出さざるを得なかった。

「戻って来れるのはよ」

「そうか、やばいか」

「露助に捕まった連中とどっちがひでえかな」

当時は何が行われていたのかよくわかっていない部分があった。

それに加えてとある新聞社がソ連を賛美する記事を書き連ねておりソ連という国家に対する認識がおかしくなっていた時期である。なおこのおかしくなっていた時期というのはソ連崩壊までである。

「本当にな」

「けれど婆さんは信じてるぜ」

若者はこのことを話した。

「今でもよ。息子さんが絶対に帰って来るってな」

「そりゃ俺だつて帰つて来たらいいって思ってるさ」

復員兵服は今度はすいとんのその団子を作っていた。流石にこれがないてはすいとんではない。まさにそれがなくてはであった。

「それはな」

「しかしそれでもかよ」

「御前も死んでるなんて思いたくねえだろ」

「当たり前だろ。生きていてなんぼだぜ」

それはこの若者と同じであった。やはり彼も裕二郎に生きていて欲しかったのだ。彼にしろ復員兵服の男にしろ決して悪人ではないのだ。底意地が悪くもなかった。

第四章

「そうだろ？だからよ」

「生きていて欲しいな」

「全くだ」

そして二人で言い合っただった。

「若し生きていたらな」

「どうするんだ？」

復員兵服の男が若者の言葉に対して問うた。

「それでどうするんだ？」

「あの婆さんと息子さんにこのすいとん御馳走するぜ」

若者はこう言うのだった。

「絶対にな」

「ほお、また随分と言うな」

「当たり前だろ。それだけの価値はあるぜ」

若者の言葉が強いものになっていた。

「生きていてそれで帰って来たらな」

「まあな。じゃあ俺もそれに乗ったぜ」

復員兵服の男もそれに乗ったのだった。

「生きていたらすいとんな」

「ああ、いいぜ」

そしてそれに頷いたのは若者だけではなかった。

「おう、いいなそれ」

「俺達もそれに入れてくれよ」

屋台の前に集まっていた客達が一斉に言うのであった。

「その祝いにな」

「何か出さず、その時はな」

「おいおい、いいのかよ」

若者は客達のその声を聞いて思わず驚きの顔を見せてしまった。

「生きてるだけでも精一杯なのにかよ」

「いいんだよ、その息子さんが生きていたらな」

「それでいいんだよ」

しかし彼等はこう言うのであつた。

「それでな。だからな」

「その時は絶対に出すぜ。あの家だよな」

「ああ、あの家だ」

復員兵服の男が客の一人が指差した家の方を見て答えた。それは確かに今もマチが住んでいるその家であつた。

「あの家に帰つて来るんだ」

「よし、俺は靴だ」

「俺は袋だ」

皆それぞれなけなしのものを出すと言つてきだした。

「帽子出すからな」

「本当に帰つて来たらな」

そんな話をしていた。しかし息子は帰つては来ない。周りはやはりこれは、と思つたがそれでもマチだけは悠然としていたのだった。

「今日も待つてるんだね」

「そうよ」

訪れてきたサクと二人その縁側で湯を飲みながら話す。茶も満足に手に入らない時代になつていたから湯を飲んでいるのである。

「今日もね。絶対に帰つて来るから」

「そう思ふのね」

「サクさんはどう思つてるんだい？」

「思つてはいるよ」

こう答えはした。

「けれど。遅いねえ」

「あの子は昔からそうだったのよ」

マチの言葉はさながら小さい子供に対して向けたものになつていた。

「昔からね。そうだったのよ」

「そういえばそうだったねえ」

サクもそのことを思い出して笑顔になった。やはりそれは小さな子供を見てそれに向けるような優しく穏やかな笑顔であった。

「いつも日が暮れるまで遊んでいてねえ」

「だから。帰るのが遅いのはわかってるから」

だからだと言うサクだった。

「安心して待ってるのよ。今でもね」

「そうなのね」

「ビルマで。苦労してるんだろうねえ」

しかしそれでもこのことは思っていた。

「英吉利の兵隊さん達と戦って」

「そうだろうねえ」

捕虜になっているということは二人にはあまりよくわかっていなかった。二人の中ではそれも戦いに行っているうちに入っているのだ。

第五章

「凄く強いだろうけれどね」

「けれどあの子は負けないから」

「ここでまた裕二郎のことを言う」

「もう少ししたら帰って来るよ」

「そうなんだね」

「そうだよ。だから待っているよ」

こう言つて微笑むだけであつた。時は過ぎていく。そうして世の中がまだ落ち着いてはいないがそれでも何かが変わつてきた頃だつた。

「おい、朝鮮で戦争かよ」

「また物騒になつてきたな」

復員兵の男はもうねじり鉢巻になつていた。若者の格好も少しはましになつた。店もすいとんからカレーになつていた。とはいつてもまだまだ粗末なカレーだが。

具は碌に入つていなく野菜の切れ端に鳥や魚の屑が入っているだけだ。そんなカレーだがそれでも客はかなり入つてきていた。

その客達の相手をしながら。復員兵服から威勢のいいねじり鉢巻になつた彼は言うのだった。その口調はかなり忌々しげなものになつている。

「あれは北の連中が攻め込んだな」

「北つていうとアカがかよ」

「ああ、あいつ等だ」

はつきりと言ひ切るのだった。

「あいつ等がやった、絶対にな」

「何か学者の中には南が攻め込んだつて言つてゐる奴がいるぜ」

「そりゃ嘘だ」

ねじり鉢巻は若者に対して言い切つた。

「絶対にな。嘘だ」

「嘘かよ」

「嘘じゃなければ何なんだ？」

彼はこうも言った。

「それで何であつという間に進撃できんだよ。おかしいだろうがよ」
「それもそうだな」

若者も言われてそのことに気付いた。

「普通はそれはないな。絶対にな」

「そうだろ？あの連中はアカだから嘘をついてんだよ」
「嘘かよ」

「嘘じゃなければデマだ」
どちらにしろ同じである。

「デマ垂れ流してるんだよ。アカが平和勢力だつてな」
「平和勢力ねえ」

「あんな連中が平和勢力なわけがあるか」
ねじり鉢巻はまた忌々しげに言い捨てた。

「何度も言うが満州のあれ見ろ」

「だよな。満州だよな」

「そうだよ。あれがアカの正体なんだよ」
カレーを客に出しながら言うねじり鉢巻だった。

「あれがな」

「そうだよな。じゃあやつぱり北か」

「そうさ。さて、どうなるかな」

ねじり鉢巻はここでその表情を真剣なものにさせた。

「これからな。日本もな」

「ここまで攻めて来るか？」

「南がやられたら絶対に来るな」

ねじり鉢巻はそのことを確信していた。

「ついでに中にいるアカ共が騒ぐぜ。注意しなよ」

「アカは全員叩き潰してやるぜ」

若者は言葉を荒くさせてきた。

「露助の肩持つ屑共が。覚悟しやがれ」

「全くだ。しかしな」

ここでねじり鉢巻の言葉が変わってきた。

「何かそれで捕虜がどんどん釈放されてるみたいだけれどな」

「ああ」

「どうなるかな」

ねじり鉢巻はここで見るのだった。マチのその家を。

「婆さんの息子さん。帰って来るか？」

「さあな。生きていたらそうなるんじゃないのか？」

「生きていたらか」

相棒の言葉にも応える。やはり二人でカレーを入れて出しながら。

「そうなるんだな」

「なると思うぜ。生きていていたらな」

こんな話をしていた。そうしてある日遂に。マチの家に訪ねてきた男がいた。

「すいません」

「はい」

また縁側にいたマチはその声に応えてまずは立ち上がった。そうして玄関に出てみるとそこには。復員兵服を着た大柄な男がそこにいた。

第六章

「只今」

髪は随分と伸びてしまっている。額は半月を思わせる生え際である。その半月が目の方から出ている、そうした形になっていた。

目は細く一重で横に一直線の感じた。眉も同じく太くはないが濃いものが一直線になっている。鼻はしっかりとした形で口もまた真一文字だ。その男がマチに挨拶したのだ。

「帰って来たよ」

「御飯あるよ」

マチはその男ににこりと笑ってこう告げた。

「さあ、早く食べるんだよ」

「で、御飯何かな」

男もマチに応えて笑顔で言う。

「お袋の漬けた茄子の漬け物ある？」

「勿論だよ。たっぷりじゃないけれどあるよ」

玄関をあがり背中の中荷物を置いた息子にまた告げた。

「さあ、白い御飯もあるしね」

「何か久し振りにお袋の飯が食えるんだな」

「そうだよ。二人で食べようね」

「ああ。久し振りに」

こんな話をしながら家に入るのであった。これが彼の帰った時だった。

「本当によかったよ」

サクもこのことを手放しで喜んだ。

「裕二郎ちゃんが帰って来て」

「だからちよつと帰って来るのが遅かったただけなんだよ」

しかしマチは笑顔でこう言うだけであった。

「ちよつとだけね」

「そうかい。ちょっとだけなんだね」

「そうだよ。ちょっとだけだよ」

またこう言うマチだった。

「ちよつとだけね。遅かったただだよ」

「そうだよね。やっぱり」

そしてサクもその言葉に納得して頷いた。

「ただ遅れたただだよね」

「あの子は昔からそうなんだよ」

やはりただ遊び過ぎた子供が遅くに家に帰って来たかのような言葉であつた。

「昔からね。帰るのは遅いから」

「そうだね。それだけだね」

サクはまた笑顔で頷いた。まさにその通りだと納得したからである。そうしてサクのにこやかな満面の笑顔をまじまじと見るのであつた。

そしてそれはサクだけではなかつた。あの屋台でもそうだった。

「戻ったらしいな」

「そうだな」

若者とねじり鉢巻が話をしていた。またカレーを作っていた。

「まさか本当に戻って来るなんてな」

「奇跡みたいだな」

ねじり鉢巻はカレーの鍋をかき混ぜていた。煮立って焦げ付かないようにする為だ。

「ここで戻って来るなんてな」

「奇跡か」

若者もその言葉に応えた。

「そうかもな。本当にな」

「それでな。覚えてるか？」

ねじり鉢巻はここであらためて彼に声をかけてきた。

「あの話。覚えてるか？」

「ああ。確かあれだろ？」

若者は皿に飯を入れながら相棒の言葉に応えた。

「息子さんが戻って来たら皆で贈り物しようってな」

「それだよ。こっちはカレーな」

「よし、じゃあやつと作れるようになった」

若者は相棒が今かき混ぜているそのカレーを覗き込んだ。

「このチキンカレーを婆さんと息子さんに御馳走するか」

「ああ、卵もつけてな」

「いいねえ、奮発だよ」

やつと鶏肉を入れられるだけ余裕ができたのである。そうして卵もやつとトッピングで出せるようになったのだ。まだまだ卵は高価ではあったが。

そうしてであった。今丁度カレーを待っていたり食べている客達も。口々に言うのだった。

「そうそう、俺達だってな」

「その時のこと覚えてるぜ」

「若し息子さんが生きて帰って来たらな」

一斉に二人に対して言うのであった。

「何かプレゼントするってな」

「言ったよな」

こんな話をしながらそのうえでカレーを食べている。そして実際にそれぞれ出すのであった。

「靴な」

「帽子だ」

「袋な」

見ればどれもあの時よりもかなり立派なものになっている。皆それぞれそれを出したのである。それだけ復興しているということだった。

「さあ、皆であの家に行つてな」

「プレゼントするか」

「そうだよな」

こんなことを話してそのうえでマチの家に向かう彼等だった。彼等もまた満面の笑顔で。街はもう家が立ち並びそうして空は晴れやかなものだった。戦争の傷跡が癒えようとしていた。そんな中で、些細な奇跡であった。マチがどう思っているともそれは奇跡であった。

奇跡はきっと

完

2009・6・27

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1393i/>

奇跡はきっと

2010年10月8日15時04分発行